

人生を心豊かに過ごす大切な「ひととき」を届ける文化講演会「JTフォーラム～ひとのときを、想う。～」(長崎新聞社主催、日本ペンクラブ、長崎県、長崎市、長崎県教育委員会、長崎市教育委員会、長崎商工会議所後援、JT協賛)が11月20日、長崎市のホテルニュー長崎で開かれました。第1部は作家・タレントで日本ペンクラブ会員の志茂田景樹さんが「忘れがたいひとときを心に積もう」、第2部はエッセイストの安藤和津さんが「明日を素敵に生きるには」のテーマで講演しました。自らの体験などを交え語り、来場した約400人が聞き入りました。それぞれの要旨を紹介します。



第一部
ゲスト



しもだ かげき
志茂田 景樹 氏 (作家・タレント/日本ペンクラブ会員)
演題：忘れがたいひとときを心に積もう

1940年静岡県生まれ。76年「やとこ屋」で小説現代新人賞を受賞し作家デビュー。80年「黄色い牙」で徳田賞受賞。その後もヒット作を輩出し、各メディアにも多数出演。最近ではボランティア・グループ「よい子に読み聞かせ隊」の隊長としても活躍している。

心のラインを消し個性貰こう

● 開き直りから「変化」

今年はいじめ事件が各地で起きましたが、私自身もいじめを受けた経験があります。小学校とは違う校区の中学に進学したので友人もいませんでした。登校初日の昼休み、私が学生服を脱くと2～3人の生徒が「何でおまえ花柄着ているのか」とからかってくるのが始まりです。私には二人の姉がおり、母は彼女たちが着ていたお古のブラウスを男物に仕立て直してくれていました。

ある日、母の頼みで豆腐店におからを買いに行ったのですが、間違えて隣の鮮魚店に向かい「おからをください」と言ってしまったところを、クラスのいじめっ子たちが見ていました。

次の日、学校へ行くと「おから、おから」の大合唱で輪の中に引き込まれ頭を小突かれ、わざと蹴りもされました。昼休みに文具店で消しゴムを買い校舎に戻ると、二階の窓から生徒たちが顔を出し「おから、おから」と再び大合唱。しかし、それが突然「オケラ、オケラ」の連呼に変わりました。私が小走りする姿がオケラを連想させたのでしょう。

そう呼ばれることも嫌でしたが子どもながらに開き直り、わざ

とオケラのように不恰好に手を振って走ってみました。そのときは当然笑われましたが、同時に変化も起こり始めたのです。以降も「オケラ」とは呼ばれ続けましたが、いじめる方も私を「面白いやつだな」と軽くからかうだけになっていったのを鮮明に覚えています。

● 自分のセンスを貰く

それから30数年後、米・ニューヨークに住んでいた友人が作家になった私へお土産をくれました。

当時、私は長編小説の執筆でホテルに缶詰め状態で、後から封を空けると現地で流行していたという、マリリン・モンローの顔をプリントしたセクシーなタイツが2足入っていました。

私はそのとき「男はくもものではないな」と思いましたが、気分転換にお風呂に入った後、なぜかそのタイツが気に入りだしたのです。試しに履いて鏡に映り、ポーズを決めるとこれが結構格好いい。なぜかさわやかな気持ちになり外出することにしました。

そのとき、40歳代半ばの3人組の男性高社マンと擦れ違いました。何か見られているような気がしたので振り返ってみると、その中の一人が私を指さしていました。いわゆる「後ろ指」です。落ち込んだのでホテルに帰って着替えようかとも思いましたが、既

に1*以上を歩いており「道も地獄、引くも地獄、ならば進んでやろう」と開き直り歩き続けました。

人間の脳はバランス感覚の調節が働くといわれています。周回に見られ続けたことで、心の殻が自然とはがれていく感じていました。不思議でしたが、冷やかな視線もだんだん心地よくなっていきました。その後街を歩くと罵声を浴びせられることもありましたが、それがきっかけで自分の好みファッションを穿けるようになりました。

私のセンスに最初に注目してくれたのは「週刊文春」です。パーティーに出席するときの装いを密着取材されました。やがてテレビのバラエティー番組から出演依頼が来るようになりました。

縮まないうい個性を隠し続けると人間は小さくなります。心をパッと開いて元気になるためには、自分の中に引いているラインを少しずつ消していくことが大切です。私自身も一歩を踏み出し自分の個性を貰ったことで、周囲の反応も自然と変わっていきました。

あえて言えば世の中はほとほと「いい加減」、言い換えれば「よい加減」で生きることがその人にとって幸せで、最も楽しいときを過ごせるのではないのでしょうか。